

「内省」による学習過程の意識化は可能か*

第二言語としての日本語学習者の自律的学習能力の養成を目指して

金 孝卿

1. はじめに

近年、日本語教育では、学習者の多様化に対応する一つの指導方法として、学習者一人一人の自律的学習能力の養成が注目され、様々な観点から議論されてきている(岡崎 1990、田中・斎藤 1993、斎藤 1998 など)。本研究では、学習者の自律的学習能力の養成を、認知心理学的な観点からとらえ、学習者の学習活動の考察を試みる。

2. 研究の背景

■2.1 自律的学習能力とは

Holec (1987) は、学習者の自律 (autonomy) とは、「自らの学習に責任を持つための能力 (ability)」と定義し、言語学習における学習者の自律の位置付けを提案している。また、Little (1991) は、言語学習における学習者の自律を、「学習の内容とプロセスに関して意識的に取り組もうとする心行動に関する能力 (capacity)」であると定義し、学習者の自律的学習能力を高めるための手助けとなる支援をフォーマルな学習の場で実施することの意義について述べている。

本研究では、先行研究の定義を踏まえ、言語学習者の自律的学習能力を、「言語学習者が自らの言語学習のプロセスと学習方法をコントロールしていくこと(自律的学習)を実現するための能力」であると定義し、その能力を高めることを手助けするひとつの方法として、「内省活動」を実際の学習活動に組み込んで行うことを試みることにした。

■2.2 なぜ、自律的学習能力の養成 (development of learner autonomy) なのか

言語学習者の自律の問題は、70年代以降の応用言語学分野の中心テーマとなってきた。特に、言語学習者の認知過程への注目とともに、いわゆる「優秀な言語学習者 (Good Learner)」の持つ言語学習ストラテジー¹⁾の記述研究が始まり、その後、学

1) 言語学習ストラテジーとは、言語学習者が言語学習の際に使用する学習方略のことである。その分類は、研究者によって多少異なるが、ここでは、O'Malley and Chamot (1990) の分類を挙げると、「認知ストラテジー (特定のタスクを行うことに直接関わるストラテジー、情報の操作・組み立てに関するもの)」「メタ認知ストラテジー (学習の計画・モニター・評価)」「社会・情意的ストラテジー (他人と協力学習をする、学習における感情を

習者中心主義 (learner - centeredness) 等と結びつき、言語学習者が自ら学習を管理するのに有効なストラテジーを教えるストラテジー・トレーニングに関する研究へと発展してきた。しかし、このストラテジー・トレーニングには、学習者の自律的学習の実現に結びつくのかという観点から、批判の声が挙がることになる。つまり、教師が学習に有効だと思われる学習ストラテジーを提示しも、学習者自身が自分の学習において、それがどう有効なのかを知らない限り、単発的に導入されて終わってしまい、その後の自律的学習の実行につながることは期待できないということである。

以上のような観点から、学習者が自分の言語学習を自律的に実施するためには、学習ストラテジーを含む学習過程の様々な側面について、学習者自身が「知ること」が重要である。そして、学習者は自らの学習過程の様々な側面について知ることを通じて、その後の学習への自信とやる気を持つようになると思われる。(Dickinson1987, Wenden1991、田中・斎藤 1993)。

■2.3 学習者が自分の学習過程の様々な側面について「知ること」；学習過程についての意識化；メタ認知 (metacognition) の形成

田中・斎藤 (1993) では、学習者の潜在的な自律的学習能力を顕在化するためには、学習者自身の「学習過程についての意識化」が重要であると指摘している。ここでいう「学習過程についての意識化」とは、学習者が自分の学習過程に関わる要素を知ることであるが、具体的には、「学習ストラテジー」と「学習環境」についての意識化である (P.44-54)。

本研究では、この意識化の概念を、認知心理学的な観点からとらえ、メタ認知の形成という概念を用いる (Wenden1991)。メタ認知 (metacognition) とは、「学習 (認知) についての認知」のことで、次の2次元があるとされる。つまり、認知過程で新しい知を構築するときその基準となる先行知識である「認知についての知識 (metacognitive knowledge)」と、認知過程を遂行するスキルである「統制技術 (Regulatory skills)」とがある。そして、我々は、認知過程において、この二つの次元のメタ認知が、外部からの要素 (タスクの認知的ゴールや実際に使うストラテジー) と相互作用しながら、絶えずモニタリングを行っていると考えられている (Flavell1981)。また、統制スキルには大きく「計画・モニター・評価」などがあり、学習の自律化に有効なスキルとされる (Baker and Brown1982)。

うまくコントロールするストラテジー) の3つに分類される。

Wenden (1991) は、このメタ認知の概念を、言語学習者の自律的学習のための学習ストラテジーと結びつけ、「自律的学習能力の養成を目指す支援」を通じて、心的変容を目指すアクション・プランを提示した。その柱は、①統合的な学習者トレーニング:学習ストラテジーのみならず、「認知についての知識」、「学習ストラテジー」、「態度の変容」を含む支援であること、②タスク中心活動:具体的な学習ストラテジーの有効性を知るためには、具体的なタスク活動を通して学ぶことが、認知についての知識の形成に有効である、となっている。

■2.4 どう支援するか；実際の学習活動に組み込んで行う「内省」

自律的学習能力の養成において「内省」は重要な要素として挙げられている(青木 1998 など)²⁾。特に、「内省 (reflection)」は、自分自身の学習行動のみならず、自分の周りの状況を含めて積極的に振り返ることで、成人教育における「成長」に不可欠な要素(三浦 2000:42-43)である。

3. 研究の目的

学習者の自律的学習能力の養成において、重要な要素とされている「内省」に焦点を当て、「内省」による学習過程の意識化の可能性を探り、実際の学習活動に組み込んで行う「内省」の教育的示唆を得ることを目的とする。

3.1 具体的な研究課題

「内省」活動を経験する授業活動の中で、

- 1) 学習者はメタ認知ストラテジーを使っているか(計画・モニター・評価)
- 2) 学習者は学習過程について意識化を行っているか(人・ストラテジー・タスク)
- 3) 学習者の自律的な学習態度は現れているか(学習への自信)

4. 研究方法

4.1 対象者

当大学の留学生特別科目補講 中級(聴解・会話)³⁾の受講生、全9名(研究留学生3、日本語日本文化研究生5、交換留学生1)、国籍は(韓国3、ベトナム2、台湾1、スロバキア1、ユーゴ1、アメリカ1)

4.2 支援の枠組み

²⁾ 関連して、self reflective learning:心理学的見地では、子どもの社会化(人間的成熟)における概念であるが、成人の場合でも、自分の依存性への知覚や、過去と現在の実生活における不安症状とを区分する内面的対話を引き起こすものである(Mezirow 1985:21)。

³⁾ 授業は、本大学の大学院生(韓国語母語話者(発表者)と日本語母語話者)のチームティーチングで行った。

実際の学習活動に組み込んだ 2 段階の内省活動 ; 「学習経験の対象化」と「学習過程の意識的な内省」からなる内省活動を、プロジェクトワークの授業活動に組み込み、繰り返し行った。

- * 「学習経験の対象化」: 学習者が自分の学習過程から出てきたものを対象化し、分析を行う
- * 「学習過程の意識的な内省」: 学習者が自分の学習過程を振り返り、意識的に評価を行う

4. 3 分析資料

内省シートの内容、内省活動中の会話、インタビュー (コース開始時と終了時)

4. 4 分析方法 (Wenden1991 の枠組みを用いる)

課題 1) メタ認知ストラテジーの使用の現れであると思われるコメントを抽出

- ・モニター: 実際の言語使用場面での問題に気づく、言語スキルの診断 (assessment)、なぜ問題にぶつかったかその原因について言及する
- ・評価: 学習やストラテジー使用の結果について言及する
- ・計画: 事前計画・事後計画

課題 2) メタ認知知識の形成 (学習過程の意識化) の現れであると思われるコメントを抽出 (person, strategy, task knowledge)

- ・人に関する知識: 学習者としての自分の学習スタイル、他人の学習スタイル、文化的要素など、言語学習における個人要因に関わる知識
- ・ストラテジーに関する知識: あるストラテジーが具体的に自分の学習にどのように有効なのか、言語学習一般に有効なストラテジーに関する知識
- ・タスクに関する知識: タスク遂行の手順に関する知識、タスクが何を求めているか、それを解決するためにはどのようなリソースが必要なのか、言語やコミュニケーションの特質に関する知識など

課題 3) 自律的学習態度 (学習への自信) の現れであると思われるコメントを抽出
⇒メタ認知知識の形成との関連から、考察を行う

5. 分析結果

課題 1)

- ・「グループでの内省」会話例 (Aさんの例); モニターを活発に行っている
- ・その日の「内省シート」; モニター、評価、計画の使用が見られる

課題 2)

① 人に関する知識の形成 (例)

⇒自分の学習スタイルが学習経験にどう関わっているかについての意識化

私はストレスを感じると誰かに話さないと解消されないタイプなので、誰かと一緒に勉強することは、自分のスタイルに合っていたと思う。私は人からコメントをもらうことが好きなタイプなので、授業でもなるべく積極的に人の話を聞いていました

② ストラテジーに関する知識の形成 (例)

⇒自分の言語学習に有効なストラテジーの発見と、その有効性についての意識化

テープで自分の声を録音して聴いてみることは、とてもいいヒントになった。・・・いろいろな場面で話して自分の声を録音して聞いてみると、発音だけでなく話し方などに結構気づくと思う

③ タスクに関する知識の形成 (例)

⇒言語の特質への意識化

プログラムの台本を作るとき作成的必要です、新しい単語、台本と録音するとき違ふから、また話言と書きことば違ふんだとということが分かりました

⇒タスク遂行中の自分の認知過程への知覚

一つのゴールに向かって工夫をするプロセスがあったからこそ、記憶に残る感じがしました

課題 3) 「学習への自信」の現れが見られた。

【Bさんの例】

【人に関する知識の形成の例】
私、せいかちな性格で、一緒にやっていると相性も
うしろな張ってこないかなと思ったり、・・・
自分に合わせて満足できないと、不満を感じる感
でした。今は相性もあまりいらぬし、彼
なりに張ってくれているんかなと思える。

⇒

【自信】
プロジェクトワークをやろうと言われて、面倒くさいなと思いましたが、やることも多くて、でも、やってみてそれが楽しかったので、これ
からも他の仕事や勉強をしていく上で、企画をしてやる機会があ
たら、今よりもっと積極的にやれるんじゃないかと思えます

【Cさんの例】

【タスクに関する知識の形成の例】
一つのゴールに向かって工夫していくプロセス
あったから、自分に残っているものが増える感
知します

⇒

【自信】
今、考えてみると、工夫することをとても自然なことだったんですね、言
いやすいことがあるから、分りやすいし、ゆえに、日本語がじゃなく
て、普通に生活でも使えるような工夫の仕方でした

【Fさんの例】

【タスクに関する知識】
私が日本に来た主な目的は語学・聞く能力のため
でした。・・・その場でやり取りができる授業だった
の目的に合っていた

⇒

【責任】
他の授業では日本人の先生が話しますが、この授業では話者が主
になりました。人の話を聞いていられるのではなく、その場で自分たちで
取りかかれる時間それが大切だと思います

6. 考察

◆「学習経験の対象化」と「学習過程の意識的な内省」の組み合わせの有効性

「学習経験の対象化」は、モニター使用の活性化を促し、タスク遂行中に行うことで、自分の言語、言語使用を対象化しやすい側面がある。また、「学習過程の意識的な内省」は、活動中に得られた気づきを意識的に F する、その日の学習のプロセスを対象化することで気づきを抽象化することができるといった役割をするといえる。

◆協働作業中に行う「学習経験の対象化」の有効性

学習スタイル、ストラテジー使用に気づきやすい。また、協働活動の中に組み込むことで、モニターの使用に有効な援助が得られる

◆体験を通じて得られた知識（意識化）は心的態度（学習への自信）に影響を与える

協働作業の中で、自らが使用したストラテジーの有効性を体験的に検証でき、抽象化された知識として記憶に残りやすい→それが新たな内的動機を誘発し、自分の学習への自信や、責任への認識といった学習態度として現れた可能性が考えられる。

◆タスクの質

①なじみのないタスク：日本語を話す自分の声をテープに録音して聴いてみるタスクは、それまで経験したことがないタイプのタスク。②意識的な思考活動を要求するタスク、言語の正確さを要求するタスク：分りやすい聴解教材の作成、台本作りと吹き込みによる教材作成

7. 示唆

- ・授業活動に組み込んだ「内省活動」の意義；意識的なモニター使用を促す
- ・様々な「内省」の組み合わせの実践可能性
- ・内省シートとセルフレポート；「学習の意識化の枠組み」に基づく分析が可能

8. 残された課題

- ・多様な学習者グループへの支援（それに合った工夫が必要）
- ・「内省」の有効性の検証—実験的試み（内省の有無、内省の質）
- ・研究方法；質問紙、ストラテジー使用の変化、観察などの多角的な方法の併用
- ・学習者の個人差、意識化の程度、タスクの質など、より精密なデータの分析が必要

*この発表は、2001年度修士論文の一部を修正、補完し、まとめたものである。

【参考文献】

- 青木直子 (1998) 「学習者オートノミーと教師の役割」、pp.4-25、報告書『—自律学習をどう支援するか—』、国際交流基金 関西国際センター 第1回分野別専門日本語教育研究会
- 岡崎暉 (1990) 「自己管理能力の養成を目指す日本語教育」『教育学研究紀要』第二部 第36巻 中国四国教育学会 別刷
- 斎藤ひろみ (1998) 「自律的学習能力を養うために教師は何ができるか」『言語文化と日本語教育』16、pp.1-11 お茶の水女子大学 言語文化学会
- 田中望・斎藤里美 (1993) 『日本語教育と理論と実際』—学習支援システムの開発—大修館書店
- 三浦省吾 (2000) 「アクションリサーチと第二言語教育研究」『英語教育』10月号、pp.43-45
- Baker, L. and Brown, A. L. (1982) Meta-cognitive skills in Reading. In Pearson (Eds.) *Handbook of Reading Research*.
- Dickinson, L. (1987) *Self-instruction in Language Learning*. Cambridge University Press.
- Flavell, J. H. (1981) Monitoring social cognitive enterprises : something else that may develop in the area of social cognition, in J. H. Flavell and Lee Ross (Eds.) *Social cognitive development, frontiers and possible future*, pp.272-287, Cambridge University Press.
- Holec, H. (1987) The Learner as manager: Managing Learning in Language Learning. In A. Wenden and J. Rubin (Eds.) *Learner Strategies in Language Learning*, pp.145-157, London: Prentice Hall International.
- Little, D. (1991) *Learner Autonomy I: Definitions, issues and problems*. Deblin: Authentik.
- Mezirow, J. (1985) A Critical Theory of Self Directed Learning, in S. Brookfield (Eds.) *Self Directed Learning: From Theory to Practice*, Jossey-Bass, pp.17-30
- Wenden, A. (1991) *Learner Strategies for Learner Autonomy*. Prentice Hall Europe.
- Wenden, A. (1995) Learner training in context : A knowledge-based approach, *System*, vol.23 No.2, pp.183-194
- Wenden, A. (1998) Metacognitive Knowledge and Language Learning. *Applied Linguistics* 19/4, pp.515-537
- Wenden, A. (1999) A instruction to metacognitive knowledge and Beliefs in language learning beyond the basics, *System* 27, pp.435-441